

伐採跡地の切り株を用いたきのこ栽培

1 はじめに

里山への関心が高まり、針葉樹林の間伐が進められています。里山の一部には、かつて薪炭林、きのこ原木林として伐採予定があったものの、需要の低下からそのまま放置され高齢化してしまった広葉樹林も見受けられます。

近年拮がりつつあるカシノナガキクイムシ被害は、高齢広葉樹の大径木を中心に被害が拡大しており、被害防止の観点からも伐採することが必要です。しかし、高齢広葉樹は伐採しても萌芽更新が望めず、伐採跡には太い伐根のみが残ってしまいます。ところが、萌芽能力のない伐根は、木材腐朽菌のきのこにとっては好都合な環境でもあります。

そこで、今回は広葉樹林の小面積皆伐跡地で、技術情報 133 号、141 号で紹介した「わりばし種菌」を用いたきのこ栽培について検討してみた結果を報告します。

2 場所

試した場所は佐久穂町（標高 900m）にあるアカマツ-コナラ混交林の小面積皆伐跡地（約 0.8ha）です。

伐採は 2006 年秋に行われ、翌年 8 月末にクリタケ、ナメコの「わりばし種菌」を接種(写真-1)、接種後は乾燥を防ぐため周辺の土壌や落葉で「わりばし種菌」が隠れるよう被覆しました。

なお、接種した伐根はクリタケ 40 本、ナメコ 13 本で、伐根の大きさは平均で長径約 50 cm、短径約 40 cmと比較的太いものでした。

3 きのこの発生

きのこの発生はクリタケ、ナメコとも接種 2 年後（2009 年）の秋から始まり、2011 年秋の段階では年々収量が増えています。今後の収量がまだ増えるのか、減るのかは現段階では分かりませんが、今まで発生がみられた伐根からはしばらく発生が続くと思われます。表には 2011 年までの発生伐根とその収量を示しました。



- 1 伐根に切り込みを入れる（写真左）
- 2 切り込みに「わりばし種菌」を差し込む（写真右）



- 3 「わりばし種菌」が差し込まれた伐根



- 4 後に直射日光による乾燥防止のため周辺の土壌、落葉で「わりばし種菌」を被覆

写真-1 伐根への「わりばし種菌」接種

表 伐根への「わりばし種菌」接種によるきのこ発生結果(2009年秋～2011年秋)

種類	接種伐根数	発生伐根数	収量(生重g/発生伐根数)
クリタケ	40	13	760
ナメコ	13	5	670

きのこの発生がみられた伐根は、接種した伐根の3、4割程度で、直射日光による高温や乾燥の影響を受けやすい場所にある伐根からは発生がみられないか、わずかに発生した程度でした。

ただし、きのこの発生に適した伐根からは接種2年後からも多く発生がみられました(写真-2)。



写真-2 上：2009年ナメコの発生
下：2011年ナメコの発生

4 おわりに

現段階での収量では、必ずしも収益が期待できません。しかし、この手法は用途のない伐根の利用、伐採後も再び山へ人を向かわせるためのアイテムという面では有効なものの一つと思われます。

また、今回は接種した伐根が直射日光にさらされない程度で、かつ、伐根位置を見失わない程度の刈り払いを毎年続けましたが、それでも雑木の成長は旺盛で、中には調査時に伐根位置を見失いかねないものもありました。したがって、接種伐根の位置確認も重要と考えます。

ただ、藪をかきわけその先の伐根に「ごっそり」出来たきのこを見つけた瞬間の感動は、それこそ「小さくともきらりと輝く」特産林産物の醍醐味なのではないかとも思えました(写真-2, 3)。

本研究の一部は、新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業として実施しました。

(特産部 古川)



写真-3 2011年クリタケの発生